

定まらぬもののスケッチ

ロベルト・ボラーニヨ著／久野量一訳

『鼻持ちならないガウチョ』

白水社二〇一四年三月

『鼻持ちならないガウチョ』は、大長編『2666』と並ぶチリの作家ロベルト・ボラーニヨの遺作で、亡くなった三週間後に出版された。「ジム」、「鼻持ちならないガウチョ」、「鼠警察」、「バルバロ・ルーセットの旅」、「二つのカトリック物語」の五編の短編のほか二つの講演録が収載されている。

本書のタイトルにもなっている「鼻持ちならないガウチョ」は、ブエノスアイレスで活躍していた非の打ちどころのない弁護士ペレーダが、アルゼンチンの経済危機を機に、「祖国」の象徴たるガウチョとして暮らすことを求めて、田舎のパンパへ移り住む話だ。だが、そこには牛も馬も残っていない、いるのは兎だけ。特異な時間感覚をもつガウチョは、「アルゼンチンの罪」か「ラテンアメリカの罪」により猫に変えられてしまい、「だから牛の代わりに兎がいる」のだった。

ヨーロッパの夜はタールを塗ったような闇だが、アメリカ大陸の夜は、虚空みたいにつかみどころがなくて、宙に浮いたように、上にも下にも守ってくれるものがない、完璧な野ざらしのような暗さだった。

ペレーダはブエノスアイレスに戻るが、そこもしょせんは「パリとベルリンが」、そして「リヨンとプラハ」が見事に混じり合ったところ。先が見えぬままペレーダは「自分にはさっぱりわからないパンパに戻」っていく。

定まらぬアルゼンチンが問われるのは国のかたちだけではない。「バルバロ・ルーセットの旅」ではその文学にも疑問が投げかけられる。

ルーセットはアルゼンチン文学の才能ある散文作家。知らぬ間に、第一作に続き第二作もフランスのモリーニの映画化に利用され、自分が「剽窃の犠牲」になった可能性に気づくが、法的措置はとらない。それ以降そのようなことはなくなったが、ヨーロッパの会議に参加するついでに、フランスに立ち寄りモリーニを訪ねることにした。するとフランスに滞在した数日のあいだに、彼は「自分個人ばかりでなくアルゼンチン文学なるものが存在するかどうかについても疑いを持つようになっていた」。

「鼠警察」は、下水道のパトロールに熱心に取り組む文字通り鼠の警察官「ペペ」の物語。本流と支流の下水道を見回すが、とりわけ彼が捜査対象とするのは「使われていない下水道」で、みつけた死体を回収し、警察まで運んでいくのを仕事としていた。あるとき古参の鼠の娘の首が引き裂かれた死体を見つけ、餓死で死んだと思われる赤ん坊の死骸もいっしょにみつかった。殺したのは蛇なのか、イタチなのか、あるいはワニなのか。もしかしたら白い蛇かもしれない。なぜ周囲がその赤ん坊の泣き声に気づかなかったのか不思議に思ったペペはなおも捜査を続けると、猿轡が発見され、赤ん坊は死に至るまでそれをか

まされていたことに気づく。だが、ペペは、自分の捜査を警戒する連中の存在を示唆され、赤ん坊の死体を処分する。その後も次々と死体がみつかる。雌雄カップルの鼠、同じ鼠に殺されたと思われる死体。だが、それでも検視官は、鼠は鼠を殺さなれと言いつ張り、警察署長からは他言無用も警告される。犬の死骸もみつかった。そしてその犬の死骸から恩恵を被って生きる鼠のコロニーもみつかった。それでもペペは真面目に熱心にパトロールに取り組む。ほかの鼠からの「何を探してる？」との問いに、ペペは「正義だ」と答える。

あるときペペは、このまま放置すればあらたな殺鼠事件が起こると察知させる鼠エクトルをみつけ、警察に連行しようとする。するとその鼠は言う。「おれを逮捕すれば事件が終わるとでも思ってるのか？ お前のボスがおれを公正に裁くとも？ きつとおれをこつそりバラして、捕食者の通り道におれの死骸を捨てるだろうよ」。二匹は死を賭して戦い、十分後には首を噛み切られたエクトルの死体が地に横たわり、事件は終わった。だが、彼にできることは「事件のことを忘れ、生き続け、働き続けること」だった。

「正義」を求めながらも、そのために尽くした行為は闇に葬られ、やはり求めた「幸福」も、「そんなものが本当は存在しないことは分かっている」、口実に、日ごろの英雄的な行動の舞台装置に、舞台の緞帳に「しかならないものだったのだ。「訳者あとがき」にあるように、この短編を読むとき、どうしてもラテンアメリカの軍政期の行方不明者を連想しないではいられない。

「祖国」、「文学」、「正義」、「幸福」……——求めても定まら

ぬままなのは「信仰」も変わらない。「二つのカトリック物語」はⅠの「天職」とⅡの「偶然」から成る。Ⅰの主人公は聖ピセンテに入れこむ十七歳の「ぼく」。聖ピセンテは、イベリアがまだローマの属州でキリスト教が公認されていなかった時代に激しい拷問の末に殺され、屍になった後も禿鷹の群れや海に投げ込まれた。だが、その都度、生前に世話をしたカラスに守られたという殉教者だ。別名サラゴサのピセンテと呼ばれ、リスボンに聖遺物がもたらされてからはリスボンの守護の聖人になっている。

「ぼく」は、神の望むままに、将来は聖人や司祭になることも考えている。ある星空の夜、道を歩いていると、最初はただの影だったのが、次第に修道士の姿になり、その修道士は駅に到着した列車に飛び乗っていつてしまう。ここまではⅠだが、ⅠとⅡはあわせ鏡になっていて、Ⅱに登場するのは「ピセンテ」と呼ばれる精神病院での入院経験もある六十歳ぐらいの「おれ」だ。「おれ」は、ある老人との口論の後、通りに出て、どんどん狭い路地に入りこむ。ある大きな屋敷に入ると、そこにはテーブルに座る修道士の姿があった。「おれ」は修道士にナイフを突き刺し、そばにいた子どもも殺して、そのまま血だらけの足跡を残しながら駅へ行き、行き先を気にせず切符を買う。修道士を刺殺した「おれ」（「二つのカトリック物語」）、エクトルを噛み殺したペペ（「鼠警察」）、本書はこのような終わり方が多く、実は「鼻持ちならぬガウチョ」のペレーダも「世界文学ついて一席ぶっていた」男の鼠蹊部を刺して終わっている。本書の最初に載せられている「ジム」では、「途方もないことを探し出して、それをありふれた日常の言葉にしてい」る

人物「ぼく」の友人のことが語られる。「クトゥルフ神話」で批判した「分かりやすく、楽しく、読みやすい文章」ではなく、ボラーニヨは、求めながらもつかみ得ぬもの、定まらぬものを、「ありふれた日常の言葉」で文章にしようとしたのだろうか。

「訳者あとがき」によれば、本書の原稿は、ボラーニヨが亡くなるほぼ二週間前に自ら出版社を訪れ、編集者に渡したものだという。そのとき本人がそれからわずか十数日でこの世を去ることをどこまで予測していたかはわからないが、それまで求め続けてきたいくつかの「途方もない」ことをスケッチしてみたのかもしれない。

(武田千香)